

ゴボウ (キク科)

地中海沿岸から西アジア原産であるが、野菜としての利用は日本だけ。連作障害が発生しやすいので4～5年は休作する。

作型		月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
春	ま	き	■			○	—	—	—	—	—	—	—	—
秋	ま	き						■	■	■	○			

1) 適地

根長が70cm以上あるので、耕土が深く、地下水位の低いところを選びます。生育適温は20～25℃ですが、発芽後は30℃を越す暑さでも生育します。根は寒さに強く、秋播きで越冬します。連作障害が発生しやすいので、4～5年は同じところで作らないようにします。

2) 品種

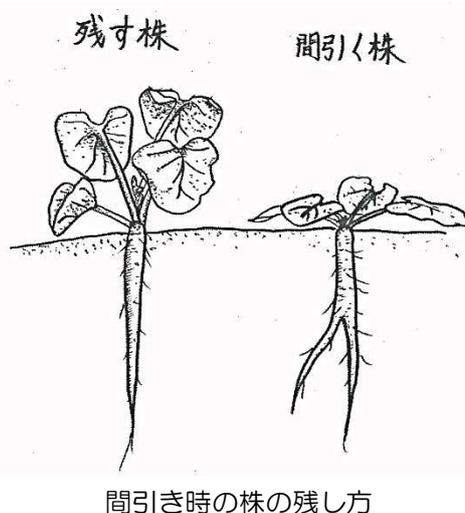
滝野川（草勢が強い晩生種）、渡辺早生、中の宮（早生）、柳川早生、山田早生（秋播き用の品種）、サラダむすめ（サラダ向きの品種）

3) 作り方

【圃場の準備】未熟な堆肥などの施用は岐根の原因となりますので、よく腐熟した良質の堆肥を用います。土壌の酸度はpHが6.5～7.5が適し、酸性が強い（pHが低い）と肥大が悪くなります。播種1か月前に1㎡当たり堆肥2kg、苦土石灰150g、B Mようりん30gを施用し、十分耕耘します。播種の1週間前には高度化成肥料100gを施用します。肥料は播き溝の下に偏らないようによく混合し、幅60cmの畝を立てます。また、耕土の浅いところは高畝とします。

【播種】春播きは4～5月、秋播きは9月下旬～10月上旬です。春播きでは、播種時期が遅れると生育期間が短くなり、十分肥大する前に冬を迎えて低温で葉が枯れてしまいます。葉が枯れると、その後の肥大が望めなくなり、収量が大幅に低下します。また、秋播きでは、播種が早すぎるとトウ立ちが多くなり、遅れると寒害により枯死するので、いずれの作型でも適期播種を守ります。播種前に、種子を一昼夜流水につけると発芽がよく揃います。播種方法は、畝の上に浅い溝を切って1cmくらいの間隔に条播します。ゴボウの種子は好光性種子と言って、光がやや当たる条件で発芽する性質があるため、覆土は薄くします。但し、覆土が薄いので、発芽までは乾燥させないように注意しましょう。

【間引き】本葉1～2枚の頃と3～4枚の頃に間引きし、最終の株間を10cmくらいにします。図のように葉柄が短く、葉が広がるよう



に伸びている株は岐根が多いので間引きます。

【追肥・土寄せ】生育期間が長いので、肥切れさせないようにします。追肥の時期は、1回目は本葉が2～3枚出た頃、第2回目は本葉5～6枚の頃です。いずれも間引き後に高度化成肥料を1㎡当たり 20g、畝肩に施して中耕し、生長点が土に埋まらない程度に土寄せします。

【収穫】春播きは9～12月に収穫でき、秋播きは翌年の6～7月に収穫します。目安としては根径が1.5～2cmになった頃から収穫を始めるとよいでしょう。ゴボウの掘り方は、なるべく根部を完全に掘り取るため、側面をスコップなどでできるだけ深く掘り下げ、折らないように注意しながら引き抜きます。また、葉が20cmくらいになったら、葉ゴボウとしても利用できます。

【貯蔵】畑に斜めに幾列にも並べて土で覆います。寒さに強いので、凍らなければ3～4月のトウ立ちする頃まで貯蔵できます。

4) 病害虫防除

連作すると紋羽病、黒斑病やネコブセンチュウの被害が大きくなりますので、4～5年はあけます。アブラムシ類やコガネムシ類の被害を受けますので、早めに防除します。

★ゴボウの波板栽培

耕土が浅いところでは、肥料袋に土をつめて栽培する方法や波板を土中に埋め込んで栽培する方法があります。波板栽培では、幅100cm、高さ20cmの畝を立て、長さ100cmに切った波板を畝面に対して20～30度の角度で、20cm間隔に埋め込みます。このとき、畝面から出ている波板の高低がないように、高さの基準となる糸を張るなどします。埋め込んだ後、5cm程度に土を盛ります。波板と波板の間に播種し、後は通常どおりの管理をします。この波板栽培は、ナガイモやシネンジョでも応用できます。

